

関係の病としての「ひきこもり」
— ひきこもり当事者本の分析を通して —

森崎 志麻

京都大学大学院教育学研究科紀要 第58号

2012

関係の病としての「ひきこもり」

—ひきこもり当事者本の分析を通して—

森崎 志麻

1. 問題

「ひきこもり」が社会問題として取り上げられて久しい。これまでの歴史的経緯を振り返ると、「登校拒否」が同様に社会的な問題として取り上げられてきた。「登校拒否」については、「学校に行くのはあたりまえ。学校に行かないのは病気だ」として、「登校拒否」に批判的な立場もあれば、『登校拒否』は病気ではない」と反論する立場もあった。後者の立場からの後押しもあって「登校拒否」から「不登校」へと呼称が変わった経緯がある。「ひきこもり」に関しても、労働に対する社会通念の強さもあって、成人しても働いていないことに批判的な立場や、非難はせずとも治療されるべきであるとする立場がある。その一方で、ひきこもりという形で社会参加しているのだとして肯定する立場など様々な立場が存在する。このように、「ひきこもり」は労働や社会参加をめぐる価値観がからんでくる問題であるといえる。しかし、それらは「ひきこもり」を取り巻く社会の側の声であり、「ひきこもり」当事者の声が軽視されているように思われる。

河合（2002）は、ある文化には「文化の病」というものがあり、その文化の中に生きる人間がその病を理解するには「物語」が助けになると述べている。ある文化の中に生きる者が外から客観的にその文化の病に「診断」を下すことはできない。しかし、病に伏した者が自分の病気についての「おはなし」を他者に語りたがるように、主観と客観をつなぐものとしての「物語」を手がかりに、病を理解することができるのではないかというのである。

そこで、社会問題としての「ひきこもり」に対して心理臨床の立場からアプローチするために、「ひきこもり」当事者が自らの体験を記した「当事者本」を手がかりにしたいと考える。当事者本はいわば、「ひきこもり」当事者から「社会」に向けられた「物語」である。「ひきこもり」は、社会的価値観がからむ問題であるからこそ、当事者が社会に向けた語りに目を向けることが、「ひきこもり」の問題を外からの「診断」とは違った形で理解することができるのではないだろうか。

2. 目的・方法

本論では、「ひきこもり」当事者が「社会」に向けて自らの体験を綴った当事者本を素材として、当事者側からみた「ひきこもり」とはどういった問題なのかを理解することを目的に、個人と社会の関係に焦点を当てながら考察することとする。

¹ 本論では、ひきこもり者を臨床群として対象化することを一旦留保し、社会との関係を踏まえた現象として捉え直すために、「」に入れて「ひきこもり」として論ずる。

2.1. 分析素材

素材として、同時期に出版された、題名に「ひきこもり」が入っている当事者本三冊を取り上げることとした。性別・年齢によって社会的背景による影響が異なってくることを考え、今回は3名とも男性で年齢も同年代によるものを対象とした。以下に、著者名、出版年、著書名と、著者の略歴について本よりまとめたものを紹介する。

- I. 勝山実 (2001) 「ひきこもりカレンダー」: 1971 年生まれ。男性。親の期待通りに勉学、スポーツに励むが中3の時にがんばることに意味が感じられなくなる。何とか高校に入りますが、勉強は手につかず、高3の時に不登校となり、中退。ひきこもりとアルバイトを繰り返す。
- II. 諸星ノア (2003) 「ひきこもりセキララ」: 1968 年生まれ。男性。小中高の時にいじめを体験しながらも学校には通い続ける。大学卒業後、親のついでで就職先が内定するも断り、ひきこもる。数年をへて美術系専門学校に入学、2年間通う。31歳の時にデザイン会社に就職。1年働いたのち退職。再びひきこもる。病院への通院や、カウンセリング、自助グループへの参加もしている。
- III. 上山和樹 (2001) 『「ひきこもり」だった僕から」: 1968 年生まれ。男性。落ちこぼれる恐怖からか中学で体調を崩し始める。高校は中退。大学に進学。学習塾でアルバイトをする。別大学を受験するため予備校に通うが受験には至らず、休学していた大学に復学し、卒業。学習塾講師を始める。精神分析の大学や医学部を目指すがうまくいかず、過食の後、ダイエット。本格的にひきこもる。ある勉強会で知り合った男性に誘われて一緒に住むことになる。その男性のついでで、ひきこもりの親の会に参加し、当事者として発言。その後も親の会に乞われて参加するようになる。

2.2. 分析手順

「ひきこもり」は、「不登校」と同様、何らかの病因論に基づいた定義ではなく、単なる状態像を表わしているにすぎない。それでも一応の定義がなされているが、その例を挙げると、“二十代後半までに問題化し、六カ月以上、自宅にひきこもって社会参加をしない状態が持続しており、ほかの精神障害がその第一の原因とは考えにくいもの”とある(斉藤, 1998)。より端的に言い表せば、「社会参加せずに、家にひきこもっている」状態が長期間続いていることと言うことができるであろう。つまり、「ひきこもり」の概念には、ひきこもるもとである「社会」と、その「社会」との対比関係で出てくる、ひきこもる先である「家」という存在が前提として含まれているといえる。ここから、①「ひきこもり」者と「社会」の関係、②「ひきこもり」者と「家」の関係、という二つの視点を基準として設け、上記三冊の当事者本に共通する語りを抽出した。こうして挙げられた語りから、当事者側からの「ひきこもり」を理解するのに必要な観点を挙げつつ、考察を進めることとした。ただし、「ひきこもり」者と「家」の関係については、「家」はひきこもる先であると同時に、社会の最小構成単位でもあるという二面性を考慮した上で考察した。一連の分析手順は、「ひきこもり」経験者への調査や、臨床現場で「ひきこもり」者とかかわる経験をもつ筆者によって行われた。

3. 結果・考察

3.1. 働くことに対する恐怖と悪循環

まず、「社会」との関係に関してであるが、当事者本の中では、社会参加の一つである働くことに対する恐怖が共通して語られていた。以下にその記述を挙げる。

「まず就職が恐かった。召集令状がきて、自分の意に反して戦場にかり出されるような巨大な恐怖であつた。」(諸星：以下、() 内に著者名を記すこととする。)

『働くぐらいだったら、死んだほうがマシ』という考えでしかなかった。それぐらいに、『働くこと』は恐怖一色に染まっていた。『死ぬ』よりも、『働く』ことのほうがこわいのです。」(上山)

「働くことに恐怖していました。」(勝山)

これらの語りからは、戦争に例えられたり、「死ぬ」よりも恐いと語られたりするほどに、働くことに対する恐怖を感じているのが分かる。戦争は、ほとんどの人が好んで行くものではなく、これまでの価値観が否応なく壊されるような体験だといえる。そのような理不尽さが「戦争」という表現の中には込められているのであろう。多くの人が「日常」だと考える社会生活が、「ひきこもり」者にとっては、正反対の恐怖と理不尽さに満ちた「非日常」の世界に映っているといえる。

その背景には、身近に社会参加している大人である親が楽しそうに見えず、外の世界へ出ることの拒否感につながっていたことが記されている。

「親が我慢してるということが子供には見えちゃってるんですね。いやいや仕事をやって、毎日辛そうに生きてる。しかもそれを子供にも勧めるんですよ。(中略) そりゃ無理でしょう。子供が矛盾を感じるのも当たり前ですよ。」(勝山)

「彼(父親のこと(筆者注))はサラリーマンが職業で一番価値があり、夢は見るな、つまり好きなことを職業に選ぶなという考え方だった。自分を殺してひたすら奉仕する仕事が、サラリーマンだと感じた。だから自分の命と時間を意思に反して犠牲にするサラリーマンにだけは、将来なりたくない」と当時から思っていた。」(諸星)

「家を出ても、結局『やはり家にいるほうがよかった』としか思えない、そんな生活しか社会にはないのか。ひきこもりは、それ自体として『耐えられない』ほど苦しい。しかし、家を出ても、『できればやりたくない』生活しか、営めないという。絶望して家に閉じこもるか、それとも『できればやりたくないのに』という被害者意識で生きるか。一人間として生きるというのは、そういう貧しい事態でしかないのでしょうか。」(上山)

このような語りからは、「ひきこもり」の問題として、働くという社会参加が魅力的に映らず、恐怖や理不尽さが感じられる点が考えられる。社会の側が、参加するに値する価値を持っているのか、そういった問いを突きつけられているといえる。社会参加している側の人間が「できれば社会参加などしたくないが我慢して働くしかない」という価値観しか提示できなければ、「ひきこもり」者は、「家を出ないといけない」と思っているにもかかわらず積極的に出ることができない、ということになる。ではなぜ、「ひきこもり」においては、このように社会の側の価値観が問題にされるのだろうか。それは、「ひきこもり」者はそういう社会の価値観をある意味、強く内面化し過ぎて、それに縛られているために「ひきこもり」状態に留まっているからだといえる。

その証拠に、「働いていない」ことを負い目に感じ、ますます外に出られなくなるという悪循環について当事者本では繰り返し記されている。

「頭の中に親や友人たちがとっかえひっかえ出てきて『なぜ働かないのだ!』と責め立てる姿が浮かぶのである。」(諸星)

「無職である。ひきこもりであるということ人で人に会いづらくなる。かといって仕事へ向かうには、一人では恐いし心細い(いい歳をして自分で言っていて情けなくなるが)。ますます働けない。そして人にも会えなくなる。悪循環。恐怖だけが雪だるま式にふくらんでいく。今日も私は焦りと、もう手遅れという気持ちを部屋の中で一人かかえて過ごしている。」(諸星)

「(将来のことを(筆者注))『何も考えていない』のではなくて、『あまりにつらいから、ひとまずなかったことにして、心の奥底でいつもイライラしている』とでもいうか。心のどこかでは、いつもそのことで苦しんでいるのです。忘れるわけがありません。」(上山)

「世間に出なければ、社会に出なければと思い、アルバイト雑誌を毎週買うのですが、怖くて中を読むこともできないのです。」(勝山)

「人間が怖いんです。働かなければという強迫観念に毎日悩まされる。」(勝山)

このように、「働くことはつらいけれども、働かなければならない」という「世間」の目が「ひきこもり」者の中にあり、苦しめているのである。もし、社会が「働くことは楽しく、魅力的である。だから、働きたければ働けばいいが、必ず働かなければならないわけではない」というような価値観を提示し、それを「ひきこもり」者が取り入れられていれば、少なくともこうした悪循環に縛られることはなくなるのではないだろうか。斉藤(2003)は、「ひきこもり」はそのきっかけは様々であるのに対し、一旦ひきこもると、その後は同じような経過を辿ることを指摘している。同じような経過とは、“脱け出そうとして焦れば焦るほどはまり込んでしまう”というもので、その悪循環を促進しているのは“世間の目や社会システムや親のプレッシャー”であるという。「ひきこもり」者に対人恐怖や強迫症状²といった個人病理と同様の症状の訴えが見られることは多い。しかし、田中(2001)は、対人恐怖症は対人場面での緊張や不安の結果、人との関係を避けようとするのに対し、「ひきこもり」は“それ以前の「人との関わりがもてない」という苦しみを抱えている」と指摘している。また、ひきこもった後に同じような悪循環の経過を辿るという斉藤の指摘から考えるならば、個人病理というよりも、「ひきこもり」状態の二次障害として出てきていると考えられる。「ひきこもり」者は、社会参加している側から、社会とは「我慢して参加するもの」というメッセージしか受け取っておらず、そういった「世間」の価値観に縛られた結果、「ひきこもり」状態を長期化させているといえる。このような意味で、「ひきこもり」には価値観をめぐる個人と社会の関係の病としての性質があるといえる。

3.2. 社会の側にそのあり方を問う

前節で、「ひきこもり」者は社会参加に対する恐怖と理不尽さを感じ、しかも「我慢して社会参加しなければならぬ」のにできていないことが負い目となり、ますます社会参加できなくなる悪循環に「ひきこもり」の問題があるのではないかと述べた。ここでは、そのような恐怖と理

² もちろん、対人恐怖や強迫症状についても、時代の状況に影響される側面はあると思われる。

不尽さについてももう少し詳しく見ていきたい。

個人と社会の関係の病としての「ひきこもり」という視点からもう少しわしく当事者本を見ていくと、以下のような語りに出合う。

「だいたい世間も医者もひきこもりを社会不適合者として治そう、治そうとする。治すのは本当にオレ達の脳みそなのか。(中略) ボクには分からない、なんでこの世間を肯定するのか、そしてそれをボクらに押し付けるのか。間違っているじゃないか。大人達だって、毎日辛そうじゃないか。全然楽しそうじゃないし、幸せそうじゃない。みんな気づいているはずさ。」(勝山)

「(支援者に対して(筆者注))自分の心の中に良いことをしてやっているという驕りがないか? ひきこもり者に対して、優越感を持っていないだろうか? 何度も胸に問うてほしい。」(諸星)

「自分たちの価値観については一点の疑いも持っていない。そんな精神構造で、人の『相談を聞いて』金を取る連中に対する激怒。(中略) 自分の周囲に、自分の思いつめたジレンマや葛藤の構造を理解してくれる人は誰一人いない。しかし、そういう『理解してくれない人たち』が結託して<社会>というものを形づくり、働いて<生活>をつくり、自分一人だけがそこに入っていない状況なので、どうしようもない。」(上山)

以上の記述からは、まず、「ひきこもり」者にとって社会は自分が入っていけない「外の世界」として認識されていることが分かる。そして、社会参加している人間が今ある社会の肯定を前提として、「ひきこもり」者を社会適応させようとする姿勢に、当事者は強い違和感を持っていることが伝わってくる。逆に、社会の側にそのあり方を問い、社会参加している人間に自らの社会適応のあり方を問うているといえる。このように、支援する者と支援される者、あるいは社会適応者と社会不適応者という関係自体が疑問視され、社会参加している側の自明性が根本から揺るがされるような関係を引き起こすところに「ひきこもり」の特徴があるように思われる。社会が考える「自明」が「自明」ではない「ひきこもり」者の感覚は勝山と上山の次のような記述に如実に表れていると思われる。

「世の中は崩れるのかなあ。乱世まではいかないだろうけど、壊れてほしいね。何も持たざるものとしては。」(勝山)

「(震災を経験して(筆者注))水道の蛇口をひねっても、水が出ない。これが、最高に、<自由>だった……。うまく言えない。が、あの『出ない蛇口』は、それまで僕を抑圧し苦しめてきた目に見えない<日常>というものが、はつきり壊れた証だった。それは、なんだかはじめて僕に自分の力で自分の肺を使って呼吸することを許してくれたような気がした。誰の所有物でもない開放された<空気>を吸っている気がした。」(上山)

乱世や水道の蛇口が出ない状況というのは、社会に生きている多くの人間にとって非日常であり、不自由であり、理不尽さを感じるであろう。しかし、「ひきこもり」者には日常に対する怒りや不自由さがあって、そのような「非日常」の世界の方が強さを発揮でき、自由を感じるという。このような「非日常」の世界への希求の根底には何があるのだろうか。

「<現在>において、『怒り』と『恐怖』が表裏一体となって身動きできないまま硬直している……それが、『ひきこもり』だと思います。」(上山)

このように「ひきこもり」状態を上山は端的に述べている。「恐怖」とは、働くことへの恐怖であり、社会全体への恐怖であろう。そして、「怒り」とは、秩序が壊れることを望むほどの怒り

であろう。一方で、「ひきこもり」者自身、内的には世間の価値観に縛られていることを考えると、「怒り」とは、世間の価値観に縛られているがゆえに出ていけない悪循環に陥っている自分自身への怒りでもあり、自分自身の意識の転換を求めているように思われる。そう考えると、世界の秩序が壊れることに対する期待は、実は「ひきこもり」者自身の内的な破壊と再生を求める心の動きにも思われる。しかし、社会に向けられた怒り全てを「ひきこもり」者の内的なものと解釈してしまうことには落とし穴があるようにも思われる。社会の側に変化を求める思いを、「ひきこもり」当事者たちが共通して持っているのであるならば、それを社会の側が受けとめることも必要なのではないだろうか。もちろん長期のひきこもり状態による二次障害としての対人恐怖や強迫症状といった症状は治療の対象となるであろう。しかし、社会参加している側にその適応のあり方を問うという共通した姿勢からは、少なくとも個人病理として理解する枠組みだけでは収まらない「ひきこもり」の本質があるのではない。

3.3. 「ひきこもり」の渦中における必死のものがき—自らの存在を書き記す

前節で述べたように、社会に対する恐怖と怒りにとらわれた壮絶な世界の中で、「ひきこもり」者は家にひきこもっている状態の中で必死に自らの存在を確かめようとしていることが以下の記述から分かる。

「いつも部屋に一人でいるので、自分の気持ち、たとえば心の中にあるどろどろしたもの、鬱屈した憎しみだとか恨みみたいなものを吐き出す場がない。自分の中に溜め込んでいるのです。それはとても辛いことなので、誰にも見られないノートやメモに、それこそ世界中の人間を殺してやりたいくらいのことを書くわけです。そうやって紙の上に吐き出すことで精神の安定を保つ。(中略) ひきこもりの人にとってこういう文章を書くことは、もう絶対必要、なくてはならないものなんです。でも同時に、絶対他人には見せられないものでもあります。」(勝山)

「また絵でも描いていないと、将来への焦りやさまざまな不安・心配事が襲ってきて、頭がおかしくなりそうになる。なにより絵を描くことは自分のアイデンティティーでもあるので、それをしていないと自分が自分でなくなる気がするので、強迫的にやっている面も強い。」(諸星)

「高校に行かなくなって、すぐに日記をつけだした。最初、偏執狂的に、秒刻みでの日常の記録。そこに書きつけられることだけが、自分の存在証明。」(上山)

溜まった感情を吐き出すために、あるいは様々な不安から逃れるために、あるいは自分自身の存在を確かめるために、というように、書くことをめぐる思いには、三者の中で微妙に色合いが異なるようである。しかし、三者とも何かを書く(描く)ことはなくてはならないものだという点では共通している。それほどに自分自身の存在があやうい状態を生きているといえる。なぜ、これほど強迫的に書くことが重要なのであろうか。

「ひきこもり」者は、世間との接点を持たず、物理的には社会と断絶しているように見える。しかし、先にも述べたように、内的には世間の価値観と一体化しているともいえ、そのために社会参加できない負い目による悪循環に苦しんでいる。勝山のいうように、ひきこもった状態ではリアルな他者との対話がなく、そうした悪循環から脱け出すことは難しい。しかし、言語の獲得によって自己が言表内容(=対象)としての「私」と言表行為者(=存在)としての「私」に分裂するように(伊藤, 2001), 書くという行為により、「書く私」と「書かれた私」という自己の

分裂が生まれる。このように書く行為を通して、内的には世間と一体化して飲み込まれそうな中、どうか他者性を保っているのではないかと考えられる。そうして「書かれた私」が、世間のみこまれそうな「私」にとって唯一の存在証明となるのではないだろうか。

3.4. 「ひきこもり」渦中における必死のものがき—天職を求める

「ひきこもり」の渦中において、書くことの他にどうしてもそうせざるを得ないこととして、勝山と上山の記述からは、仕事をめぐる強烈な思いがあることがうかがえる。

「(誰でもいい代わりがきく仕事、働き甲斐がない仕事に対して(筆者注))ボクはそれに耐えられないんです。せめて勝山君じゃなきゃだめだっていうものがほしい。そういうことに耐えられるか耐えられないかが、ひきこもりかひきこもりじゃないかを分けるひとつの要因ではないかとも考えたことがあるんですよ。」(勝山)

『「これだ、これのために、自分は生まれてきたんだ」』そう思える対象や研究テーマに、どうしても出会えなかった。それがないと、自分は『基盤がない』、生きていく自信の支えがないと思った。それを息つく暇もなく探求した。」(上山)

このように天職ともいえる自分の存在基盤と結びつくものとしての仕事を求める様子は、社会的役割を取ることに失敗して喪失した自信を補償するためのファンタジーであり、自己愛の表れともいえるが、それだけではないのではないだろうか。そもそも仕事をするとは、社会的役割を担うことだが、社会的役割を演じるとは、一般化された「他者」というものを内在化して、自らも他の何者かになることを意味する。そうした社会的役割によって仕事になされるということは、社会機能的には他の人でも代わりがきくということでもある。例えば「教師」という社会的役割を考えたとき、もちろん各々の教師の持ち味や人間性といった固有性はあるとしても、「教師」という社会的役割は他の人に取って代わることができるものであり、そうでないと仕事としては社会的に成り立たないであろう。しかし、勝山はそれには耐えられないという。「自分が何者でもないという状態は不安だ」(勝山)というように、何の社会的役割も持たない存在であることには耐えられない一方で、代わりがきく立場も耐えられない。その背景には、「結局、自分のすべてが借り物だったということに気づかされる。とにかく偽りのない自分を手に入れたい」(勝山)、『与えられた自分』を『自分で選び取った自分』に転化させようとして失敗し、途方に暮れてしまったのがあの状態だった」(上山)というように、借り物でも偽りでもない自分自身でありたいという強い気持ちがあるようだ。このような葛藤の中では、何らかの社会的役割を演じることは難しく、他の誰でもない「自分自身のまま」、その固有性を残したまま社会に出ることを求めざるを得ないのではないだろうか。これは、一切の社会的役割を拒否しているように見えるかもしれないが、余人には代えがたいと「社会」が認める立場がないと社会参加できないということは、むしろ誰にも奪われない役割を社会の中に強く求めているともいえる。上山や勝山が当時著書を出しているのは、このような誰にも代えがたい役割への強い希求のもと、「ひきこもり」当事者という固有の社会的役割でもって社会に参加しようとしているといえるかもしれない。

3.5. ひきこもった状態からの変化の契機—外の世界に魅力を感じる

ここまで、「ひきこもり」者の持つ社会に対する恐怖についてみてきたが、そこからの変化に

は一体どのような契機があるのだろうか。当事者本の以下の記述が手がかりになりそうである。

「ところがそれから数年後のある晴れた日に弟にドライブに誘われた時のこと、車窓に広がる青空を見ていたら、『運転できたら気分がいいだろうな』と感じた。そこで自発的に教習所に通うようになった。」(諸星)

「(知り合った男性から一緒に住もうと誘われた時のこと(筆者注))しかし、このまま『家について頑張る』っても、絶対にどうにもならない、そのことだけは断言できた。家について頑張ってもどうにもならない。可能性はゼロだと断言できた。なら、何の保証もなくていいから、別にやりたいことがなくてもいいから、家を出て、ぜんぜん違う人間関係や環境に身を置く努力をしたほうが、ちょっとでも可能性がないか?」(上山)

両者の記述からは、働くという形ではないが、車を運転するであったり、家族以外の他者と住むことであったりと、外の世界が魅力的に思えた心の変化がうかがえる。上山の場合は、消極的な決断ではあるが、少なくとも家でひきこもっているよりは外の世界の方が可能性があると感じられたことが分かる。「ひきこもり」者に対する引っぱり出し支援を行っている工藤(2004)や「レンタルお姉さん」(2009)と呼ばれる活動で試みられていることもこれと同様で、家にひきこもっている青年に対して、少なくとも家にひきこもっているよりは外の世界の方が楽しいというメッセージを伝えて引き出そうとしていると考えられる。その方策が必ずしも良いというわけではないが、社会に対する恐怖が「ひきこもり」状態に留めているとするならば、ひきこもった状態からの変化の契機の一つとして、外の世界が魅力的に感じられることが重要だと考えられる。

3.6. ひきこもった状態からの変化の契機—家族以外の第三者との関係

変化の契機として更に加えるとするならば、上山の記述からは、家族以外の第三者との関係が生まれることの重要性を知ることができる。

「(ネットで知り合った女性のこと(筆者注))彼女に会いたかった。(中略)そのとき僕は、すでに『自分のこと』を孤立して悩んでいたのではなかった。『この人とつきあいたい』それはすでに、『関係』について悩むことだった。『つきあわねばならない』のではなく、『つきあいたい』。後知恵だが、ここはどうしても無視できない。この世に居残って努力する理由、自分を説得する理由。いや、説得する必要もなかった、いつの間にかそう『したい』と思っていた。」(上山)

「私自身は、ひきこもりとは直接はなんの関係もない友人たちとの出会いによって家を出ました。これは要するに、『求めてもらえた』からなんです。つまり、『上山を助けてやる』ではなくて、『来てほしい』。あるいは『出会えてよかった』。つまり、一方的に見下されてできた治療関係ではなくて、私の中にある才能なり感性なりを評価してもらえて、向こうが私との出会いを喜んでくれた。」(上山)

外の世界の人間である他者との間に関係が生まれることは、それまで恐怖と怒りの対象であった社会との関係にも変化が起ることを意味している。ここでは、上山が「『つきあわねばならない』のではなく、『つきあいたい』」と思ったということが非常に重要だと思われる。つまり、社会の側から「我慢して働かねばならない」といった義務としての社会参加のメッセージしか受け取っていない者が、「～したい」と自ら欲望するという転換が起っていることを意味するからである。また、3.2.で述べたように、今ある社会の肯定を前提として、「ひきこもり」者を社会適応

させようとする社会の側の姿勢に強い違和感を持っている当事者にとっては、社会適応させようとして出会ったのではなく、人として会いたくて会ったという関係が外の世界に出る上で非常に重要であったと思われる。また、こうした他者との一対一の人間関係は、代わりがきく役割ではなく、「自分自身のまま」、自らの固有性を保った形で社会とつながれるという意味で、外の世界に出ていく大きな契機となるのではないだろうか。

3.7. 性の問題

社会参加の中でも、働くことの葛藤については最初の節に挙げた通りであるが、もう一つ、社会参加の重要な側面として、性の問題が当事者本では挙げられている。

「ひきこもりは、普通は『社会的・経済的挫折』と見なされます。それはわかりやすい話です。実際、そうですし。でも、私が思うに、ひきこもりには、もう一つ重大な挫折が秘められています。これまではあまり触れられていないんですが、『性的挫折』です。これは、決定的です。」(上山)

「童貞コンプレックスで、人前に出にくくなった。(中略) 恋人が欲しい。でも女性に近づくのは気後れする。二律背反の気持ちに、苦しむ。(中略) また相手に対して身も心も裸になることが、恐くてできなかった。」(諸星)

「恋愛コンプレックスでしょうか。(中略) ようするにかわいい女の子と付き合いたいんです。でも、ひきこもってはいは付き合えないんです。だから今日も一人。外に出るのは辛いんです。世間、社会が嫌なんです。人間が嫌いなんです。こういうのを葛藤というのでしょうか。答えが出ません。」(勝山)

上の記述からは、性的関係を持つことに関心はあるが、同時に恐怖心もあって関係を持つことができない様子や性的関係が持てない自己に対する挫折感が伝わってくる。今回取り上げた三者は全て男性であるが、社会における理想的な男性像を考えた時に、このような性的な挫折感を女性よりも強く感じている可能性は考えられる。

語りからは、働くことと同様の葛藤があるようにも思われるが、働くことと性的関係を持つことに違いがあるとすれば、働くことには義務の意識が強いが、性に関しては「恋人が欲しい」、「付き合いたい」とあるように、「～したい」という欲望の方が強いように思われる。3.6.で家族以外の第三者との関係が生まれることの重要性を述べたが、最初に上山が外の世界に魅力を感じた契機も女性と「付き合いたい」と思ったという関係への欲望であったように、性の問題は「ひきこもり」にとって外の世界に魅力を感じる重要な契機であると思われる。

また、ここでいう性の問題とは、性的欲望を満たすということに限らず、根本的に異質な存在と出会うことを意味する。「『ひきこもりからの自立』というのは、実は『親とは関係ないところで自分独自の性的関係、性生活をつくっていく』プロセスでもあると思うのです」(上山)と述べられているように、親とは異なる存在と出会い、働くことによる社会的・経済的自立と同時に、性生活をつくっていくこともまた「ひきこもり」からの自立の一つの重要な側面として位置づけられる必要があるように思われる。

3.8. 親との関係

3.1.では、働くことや社会に対する恐怖のために、また、働けていないことへの負い目から悪循環に陥り、ますます「家」にひきこまざるを得ない「ひきこもり」者の姿が見えてきた。3.5～3.7.では、外の世界に魅力を感じる契機として、家族以外の第三者との関係や性の問題の重要性を取り上げた。このように、「家」は、恐怖の対象である社会からひきこもる先であると同時に、「ひきこもり」から抜け出す上では家族以外が存在が重要だとして、対比的に述べられてきたが、「家」との関係そのものについてはどのような語りが見られるだろうか。当事者本から共通して語られた例を挙げていくが、一点断っておくと、これらは全て、家にひきこもった状態が続いた後の親子関係に関する記述である。

「何せボクは人一倍の親孝行。ベストを尽くして、ぶっ壊れて精神科行きです。ははは。それでも、おまえら（親のこと。（筆者注））は諦めない。すばやい社会復帰を要求する。ルールへ復活しろと。恥をかかせた代わりにとっととりハビリして、何でもいい、世間体を保てという。」（勝山）

「私のアイデンティティーを認めず、ひたすら父の信じる“正しさ”を押しつけられダメ出しされ続けるのでは、自分の存在自体が生まれながらの“悪”であるかのように認識される。そのせいで自己肯定感が未だに持てずに苦しんでいる。」（諸星）

「（自立を求める母親との言い合いでガラスを割るなど物に当たった時の話（筆者注））『お母さんが何をした！！』『好き放題させといてこれか！！』『いつまでこんなことさせるんや！！』という悲鳴のような叫び声が聞こえてくる。罪悪感と、『僕はもうこの世界にいてはいけない』という行き場のない絶望で意識が麻痺していく。」（上山）

ここで、言及しておきたいのは、三人の間に共通した親子関係の傾向があると言いたいわけではないということである。むしろ各々親子のあり方は異なっている。勝山の場合は、親の期待に応えようとした結果、無理がきてしまった経緯があるが、それでも社会復帰を求める親との間に軋轢があるようである。諸星の場合は、父親の価値観に反発心があるが、就職を前にひきこもり、働くことを含め常識で責めてくる父親に反論するだけの自信が持てずに苦しんでいる様子が伝わってくる。上山は、色々と進路の希望を変える度に協力的な親だが、自立を急かされて焦りと絶望に苦しむ姿がみえる。このように各々に異なる親子関係のあり方を前提とした上で見えてくる共通性は、ひきこもり状態に対する親の側の自立を求める「常識」や「正論」に、「ひきこもり」当事者は逆に反発心を強めたり、自己肯定感をなくしたり、罪悪感を持ったりしてますます外の世界に出られなくなるという悪循環に陥っている点である。親の側からすると、自立を求めることはもっともなことであり、こうした親の価値観は「ひきこもり」を抱えた家族に特異なものではなく、むしろ、社会の多くの人間が共有する価値観であろう。しかし、このような「常識」や「正論」をぶつける親と、それによってますます外に出られなくなる「ひきこもり」者の関係は、3.1.で述べた「ひきこもり」者自身の中の働くことをめぐる意識の悪循環と同様に、「ひきこもり」状態を長期化させている本質的な問題の一つであり、価値観をめぐる当事者と親との関係の病としての「ひきこもり」の性質があるといえる。「社会」との関係で悪循環に陥り、社会に出られず「家」にひきこもる。ところが「家」もまた「社会」の一部として機能する側面があるため、「ひきこもり」者にとっては、「家」との関係においてもまた悪循環に陥っているといえる。

このような親との関係に対して、諸星は以下のように、「ひきこもり」から自立していくために必要なこととして親に理解を求めている。

「(父に対して(筆者注))私のやることにいちいちとやか言ったりせず、理解の眼差しを送ってくれたら、私の気持ちちがどれだけ穏やかになることか。(中略)その安堵感は、私が前向きな気持ちになるための精神的土台になるような気がする。」(諸星)

こうした一方、上山は以下のように述べている。

「子は、結局は親とは無関係な別の人格です。結局は、親とは関係ないところで、親の知らない形で勝手に人間関係をつくっていくし、そうすべきでしょう。親子のコミュニケーションにこだわりすぎることは、そういう自立した人間関係の発展を阻害すると思います。」(上山)

諸星とは逆に、親の理解にこだわることは「ひきこもり」状態からの自立の助けにはならず、家族以外の第三者との関係を重視するよう述べている。両者は反対のことを言っているようだが、どちらも、親との関係に悪循環があると認めているからこそ、それ自体を変えたいと願い、そこを土台にしてしか第三者との関係を築くことに進めないと考えるのか、あるいは親との関係に解決の糸口を求めずに第三者との関係に可能性をかけるかの違いであると思われる。

4. まとめと今後の課題

「ひきこもり」当事者の「社会」との関係、「家」との関係に焦点をあてて、当事者からみた「ひきこもり」についてここまで分析を進めてきた。「社会」との関係については、働くという社会参加に対する恐怖と、そこから、「ひきこもり」当事者にとって社会が、自分たちは属することのできない「外の世界」として認識され、恐怖と怒りの対象となる過程がうかがえた。そして、「ひきこもり」当事者自身が働かなければならないという世間の価値観を内在化しているがゆえに負い目が増し、更に働くことは苦しいという負のメッセージばかりが受け取られて、ますます外の世界に出ていけないという悪循環があることが理解された。同様の悪循環は、「ひきこもり」当事者と親との関係にも見られた。この意味で価値観をめぐる個人と社会の関係の病としての「ひきこもり」の性質が見えてきた。ただし、こうした「社会」や「親」との関係における悪循環に関しては、今回取り上げた三者は全て男性であったという点は考慮する必要があるだろう。「働かなければならない」という社会的プレッシャーは、男性の方が強く受けている可能性は高く、親からの圧力も女性よりも男性の方が強い傾向にあると思われる。それが、負のメッセージばかりが受け取られてしまう要因の一つとしてあったと考えられるだろう。今回は「ひきこもり」状態とそこからの変化を分析対象としたが、「ひきこもり」者がそもそも社会や親から否定的なメッセージしか受け取れず、魅力的な側面の取り込みがなげうまくなかったのかについては、ひきこもるまでの社会や親との関係について今後詳細に見ていく必要があるだろう。

次に、「ひきこもり」状態からの変化の契機としては、外の世界が魅力的に感じられることや、家族以外の第三者との関係の重要性が指摘された。社会的役割を取る事が難しい「ひきこもり」者にとって、第三者と「自分自身のまま」つながれることは外の世界に出ていく契機として重要なのではないかと考えられた。しかし、その後の社会的役割を担って働くことに結びついていくにはまた別の段階があるといえる。

また、今回取り上げた当事者本を書いた三者は、自らの状況を言葉にするだけの他者性が保持されているといえる。しかし、彼らのように書くことのできない「ひきこもり」者の存在が多くいることも事実である。もちろん、自らの状況を書くことのできない多くの「ひきこもり」者たちを代弁しているとは考えられるが、彼らと他の多くの「ひきこもり」者との間に本質的な違いがある可能性も考えられるだろう。この三者は、「本」という不特定多数の他者に向けて発信するという手段を選んだという点から、社会の側に何らかの変化を与えたいという傾向が強い可能性が考えられるだろう。彼らは当事者本を書くという形で「ひきこもり」者という社会的役割を担って社会参加したといえる。先に述べたように、そこから別の社会的役割にどのようにつながっていくのか、その答えは分からない。また、「ひきこもり」者から別の社会的役割への道筋を筆者が考えていること自体が、「ひきこもり」当事者からすると「外の世界」の側の価値観であるともいえる。石川（2007）は、「ひきこもり」当事者がどうすれば納得いく形で生きていけるのかを考える内面の作業を見過ごしたまま、社会の側が「社会参加」を回復のゴールに設定することに疑問を呈している。それでは、働かないことや「ひきこもり」者としての社会参加を許容する価値観を社会の中でどのように位置づけていくかという、難しい問いである。また、働くことが魅力的に思えない「ひきこもり」当事者に対して、働くことが魅力的だと応じることができるのか、魅力的だと思えるような働き方をしているだろうか、という問いも持たざるを得ない。このように筆者も含めて、一人ひとりが、社会がいかにあるべきなのか、社会でいかに生きるべきであるかという問いを抱えるしかなく、そういった問いを投げかけるという意味でも関係の病として「ひきこもり」の問題は存在するといえるのではないだろうか。「ひきこもり」当事者からの「物語」をいかに引き受けて、自らの「物語」をいかに生きるのかが問われているといえる。

文献

- 比古地朔弥（2009）：レンタルお姉さん物語—ひきこもりと社会をつなぐ天使— 扶桑社
 石川良子（2007）：ひきこもりの＜ゴール＞ 「就労」でもなく「対人関係」でもなく 青弓社
 伊藤良子（2001）：心理治療と転移—発話者としての＜私＞の生成の場 誠信書房
 勝山実（2001）：ひきこもりカレンダー 文春ネスコ
 河合隼雄（2002）：「日本人」という病 序説 日本人の生き方 河合隼雄著作集第Ⅱ期第10巻 岩波書店
 工藤定次・YSCスタッフ・永富奈津恵（2004）：脱！ひきこもり ポット出版
 諸星ノア（2003）：ひきこもりセキララ 草思社
 斉藤環（1998）：社会的ひきこもり 終わらない思春期 PHP新書
 斉藤環（2003）：ひきこもり文化論 紀伊國屋書店
 田中千穂子（2001）：ひきこもりの家族関係 講談社＋α新書
 上山和樹（2001）：「ひきこもり」だった僕から 講談社

（心理臨床学講座 博士後期課程3回生）

（受稿 2011 年 9 月 2 日、改稿 2011 年 11 月 25 日、受理 2011 年 12 月 26 日）

“*Hikikomori*” as Illness of Relationship: Through Analysis on
Autobiographical Works by “*Hikikomori*”

MORISAKI Shima

The aim of this thesis was to understand “*hikikomori* (social withdrawal)” phenomenon from the viewpoint of “*hikikomori*” themselves. The analysis was done through three autobiographical works by “*hikikomori*” based on two aspects: the relationship between “*hikikomori*” and the society from which they have withdrawn, and the relationship between “*hikikomori*” and their homes to which they withdraw. It is suggested that “*hikikomori*” people are afraid of working in society, but at the same time they internalize the social values that they have to be working, which leads to a the negative spiral where they are ashamed of themselves for not working and find it even more difficult to participate in society. As they are in a negative spiral because of the negative message they receive from the society, “*hikikomori*” can be thought of as an illness of social relationships. A similar spiral can be seen in the relationship between “*hikikomori*” people and their parents who apply pressure to them with social values. The perspective of “*hikikomori*” as an illness of social relationships leads us to question our social values and how we can respond to the message from “*hikikomori*” and improve the way we live in society.